

女子プロレスラーの身体とジェンダー

— 規範的「女らしさ」を超えて —



- 合編 飯子 著
- 朝倉書店
- 2013年初版
- 2,800円(税別)

現代日本において理想的な女性身体とは、ほっそりして、脚が細く長く、胸が適度に豊かな身体とされる。そして身体的脆弱性が女性の特徴とされる。それに対して、女子プロレスラーはプロレスをするために、筋肉と脂肪をつけ、大きくたくましい身体をつくらなければならない。理想的な女性身体とはまったく異なる方向に、みずからの身体を改造していくことだ。本書は、そうした彼女たちの身体意識をつらねて、理想の身体というジェンダーの呪縛から解放される可能性を探っている。

女子プロレスラーといえども、ジェンダー規範が理想の身体イメージから完全に自由なわけではない。しかし彼女たちの多くは、窮乏あがた自分の身体に誇りをもち、それによって男性の暴力性に対抗する自覚をつき、身体による演技で観客を魅了することで喜びを得ていることが分かる。それが彼女たちの自己肯定感につながっていく。要は、自分の生き方に自信をもつこと。その意味では、理想の女性身体から遊離した彼女たちの身体は、ジェンダーからの解放の可能性を示唆している。

ている。

女子プロレスというかなり特殊な世界の語だが、本書で提起されている視点は、女性の意識を変革するという普遍的な課題を見すえている。

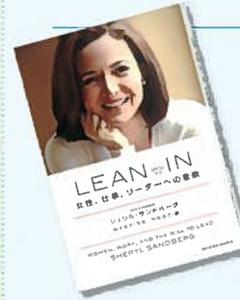
著者 小倉 孝誠 (慶應義塾大学文学部教授)

身体的脆弱性

女性が社会化される過程で、みずからの身体力が脆弱だと感じる。この過程においては、さまざまな要素が絡まってくる。まず女性は他者の感情に配慮し、振舞いの点では解かで積み深いことを求められる。その結果、身体的な力行使することを女性らしくないと感じるようになる。教育の場では、男性と違って女性は運動能力を高めることを期待されない。そしてメディアは、女性の身体を弱く受動的な客体、あるいは無力な犠牲者として提示する。こうして身体を媒介にした「脆弱な女性」という表象が形成され、ジェンダー秩序に組みこまれていく。

LEAN IN (リーン・イン)

— 女性、仕事、リーダーへの意欲 —



- シェリル・サンドバーグ 著
- 川本 裕子 序文
- 村井 章子 訳
- 日本経済新聞出版社
- 2013年初版
- 1,600円(税別)

この本を知ったのは、関係会社の社長に就任したばかりの友人が「シェリル・サンドバーグの『リーン・イン』を読んで、自分を励ましています」と、興奮して伝えてきたメールがきっかけだった。翌日、また別の友人から届いた「元上司がこんな資料を送ってくれ、えらく元気になりました。驚いたのは、米国のエグゼクティブクラスの女性でもこのように感じているという点です」というメールに添付されていたのは、日本語版出版を機に来日したサンドバーグ氏へのインタビュー記事。私が、『リーン・イン』を購入するため、急いで書店に駆け込んだのは言うまでもない。

著者は、自身のさまざまな体験を通して、その時々々の感情の波を冷静に分析し、「内なる障壁」の存在を明らかにしている。著者のようなアメリカのスーパーウーマンでも、男女平等がここまで進んだアメリカ社会でも、男女のステレオタイプが深く刷り込まれているということに驚かされた。また、あらゆる分野におけるジェンダーバイアスについて興味深い研究結果やデータが示され、50ページにわたる原注に詳説さ

れている。この原注だけ読んでも勉強になることばかり。一番感銘を受けた言葉を紹介しよう。「自分に自信がないと感じるのは必ずしも正しい認識に基づくものではない」という点を理解すること。そして、男性と同じテーブルにつくこと。そうしなければ、今の社会を変えていくことはできない、日本の多くの女性を奮い立たせてくれる。

訳者 内海 房子 (国立女性教育会館理事長)

内なる障壁

女性の社会進出が進み、女性の管理職などいろいろな分野で活躍する女性も増えてきたとはいえ、男女共同参画社会の形成にはまだほど遠いのは、指導的地位にある女性比率の低さからも明らかである。女性が社会で活躍するための外的障壁については、かなり認識されているが、内なる障壁についてはあまり議論が尽くされていない。「女性が力を持つためには、この内なる障壁を打破することが欠かせない」と著者が主張する。そして「この障壁は自分でどうにかできる。今日でも自分の力でこの殻を打ち壊すことができる」と力強く励ましている。

女性ホームレスとして生きる

— 貧困と排除の社会学 —



- 丸山 里美 著
- 世界思想社
- 2013年初版
- 2,900円(税別)

「女性ホームレスを見たことがありますか」と学生に聞くと、「ホームレスに女性のイメージはない」という反応が多い。私たちは先入観に捉われ、女性ホームレスの存在を認識できず無きものとしてがちである。しかし、人口の半分以上が女性であることを思えば、ホームレスは男性という観念が正しくないことに容易に気づくだろう。では、一体どこに?

ホームレスを「野宿者」という狭義で捉えるかぎり、そこに女性を見出すことは難しい。居所の不安定な女性の多くは親族・友人宅に居候したり、社会施設へ滞在するため、野宿という究極の形態に陥りにくい。そのため「隠れたホームレス」となりやすい。本書では、女性野宿者はなぜ相対的に少ないのか、従来のホームレス研究が女性を見落としてきた、その背後に横たわるものを探究する。

著者は女性ホームレスの生活世界に丁寧に寄り添い、そこにみられる一貫性を持たない選択や矛盾する行為の繰り返しを、自分で決断・実行することへの逡巡・躊躇の境れと解釈し、その背後には親密な関係に

ある他者のケア責任や他者の要求にこたえることを期待されてきた歴史的過程があると読み解く。本書が取る「ケア倫理」のアプローチは、諸制度・支援・研究が所与とする「合理的人間」を炙り出し、女性ホームレスを不可視化する認識の枠組みに警鐘を鳴らす。

著者 川原 恵子 (東洋大学社会学部講師)

隠れたホームレス

日本では野宿状態のみをホームレスと定義するが、国際的には(1)屋根なし、(2)家なし、(3)不安定、(4)不適切な4類型の枠組みで捉える。野宿は(1)、定住先がなく施設やネットカフェなどに一時滞在する人は(2)、DVなどで生活を脅かされている人は(3)、居所はあるが過密状態で住居にはほど近い前にいる人が(4)である。どこまでを社会的対応が必要と捉えるかは国により異なるが、(1)の「目に見える」ホームレスに男性が多いのは国際的に共通している。

マイ・レジリエンス

— トラウマとともに生きる —



- 中島 幸子 著
- 梨の本舎
- 2013年初版
- 2,000円(税別)

DV被害がその人の人生に長期にわたりどれほど深い影響を与えるかは、あまり知られていない。DV防止法制定から12年を経て、DVという言葉は広く一般に知られるようになったが、被害の実態に関してはまだまだ誤解と無理解が横行している。

本書は、DV被害に関するすぐれた当事者研究でもある。著者のすまじい暴力被害は言わずもがなだが、全篇を貫いているのは、被害者のトラウマから回復し成長するプロセスがどれほど苦痛に満ち、死と隣り合わせの日々とともにあるかを痛直に描こうという姿勢である。それは勇氣といふより自らの経験を事後的に伝達可能にするための必死な試みと思え、それが深く胸を打つ。被害者にとって重要なのは「知識」であり、真の知性とはこうして生き延びるためにあるのだと思った。

被害者支援の活動を展開しながらトラウマの影響と格闘している著者は、DV被害者を共依存と呼ぶことへの警鐘も忘れない。逃げることだけが解決されがちな支援が定着しつつある今、DV関係者には長期的

視点を得るためにぜひ読んでもらいたい。もちろん、多くの男性にとっても貴重な読書の機会に違いない。

著者 信田 さよ子 (原宿カウンセリングセンター所長)

共依存

1970年代末にアメリカのアルコール治療関係者から生まれた言葉である。もともとはアルコール依存症者の妻を指していたが、のちにアディクション(嗜癖)において、不幸でいながら離れられない関係性のことを指すようになった。家族関係をひとつのシステムであるとする発想が基本となっているため、夫婦間でこの言葉を用いると力関係の不平等が隠へいされる危険性がある。介護・親子などケア関係における「相手を弱者化して支配すること」だけに限定し、夫から離れられないDV被害者に対して用いることは、被害者を責めて二次被害を与えかねない。厳しく使用を禁止すべきである。